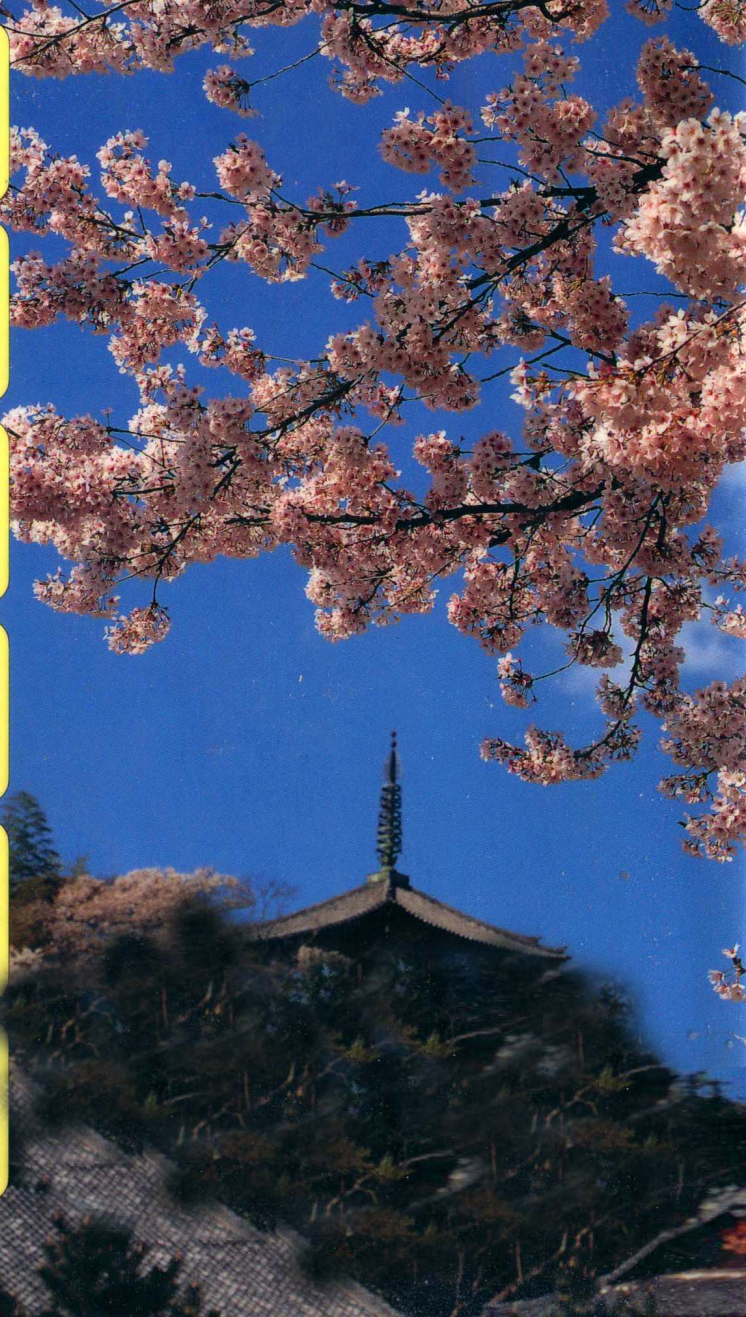


万葉集
歳時記



■この本の作者

文 吉野正美 (よしの まさみ)

1936年犬山市に生まれる。青山学院大学を卒業後、アナウンサーとしてNHKに入局。万葉学者・犬養孝氏と万葉集の番組を担当する。著書『わたしの万葉』、『万葉集の植物』、『万葉ロマン紀行』、『万葉の百人一首』など。

写真 川本武司 (かわもと たけし)

1944年、奈良県に生まれる。日本写真専門学校卒業。日本写真家協会々員、二科会々友。写真展「大和・かぎろひの国」「花の大和路」を開催。著書に『大和路・四季と花』『万葉風土記』全3巻、『万葉集の植物』などがある。

写真協力 ネイチャー・プロダクション

NDC911.12 215p 19cm×13cm

装丁レイアウト=澤田 豊/イラスト=実守重夫

万葉集歳時記

1994年4月1刷発行

文 吉野正美

写真 川本武司

発行者 今村正樹

発行所 偕成社 東京都新宿区市谷砂土原町3-5

☎編集03(3260)3229 販売他03(3260)3221

©Masami YOSHINO,

Takeshi KAWAMOTO 1994

印刷所 小宮山印刷/製本所 常川製本

偕成社は、平日も休日も24時間、電話でもFAXでも本のご注文をお受けしています。ご利用ください。電話 03-3260-3221(代) FAX 03-3267-0124

Printed in Japan

ISBN4-03-529280-X

The background of the cover is a scenic landscape photograph. It shows a mountain valley with cherry blossoms in bloom. In the foreground, there is a large, bright yellow flower, possibly a tulip, which is out of focus. The sky is blue, and the mountains in the background are covered in green trees.

万葉集
歳時記

吉野 正美文
川本 武司 写真

はじめに

一二の目 のみにはあらず 五六三

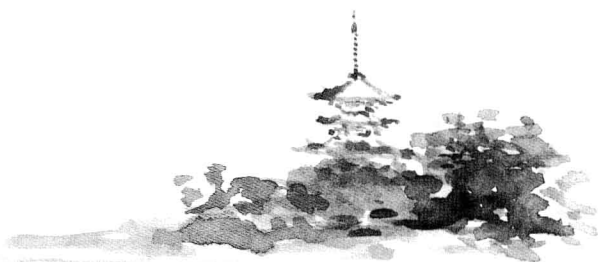
四さへありけり 雙六の采

長意吉麻呂（十六―三八二七）

「こんな歌ぐらい、誰にだつて出来るよ」と言われそう
な意吉麻呂の歌は、まるでコロンブスの卵のようです。

万葉びとも雙六を楽しみ、平成のわたしたちと同じよ
うに花を愛で、鶯の声に耳を傾け、海の幸に舌鼓を打ち、
七夕の世界に夢を馳せました。コオロギやセミが鳴き、
熊が歩き鶯が舞い、夕立が暑さをやわらげ、簾がゆれて
秋を告げるなど、『万葉集』は千三百年の時を超えて、古
代の人びとの自然への心配りや暮らしぶりを教えてくれ
ます。

土用の丑の日、大伴家持のこんな歌は如何でしょうか。



石麻呂に われ物申す 夏瘦せに

よしと言ふものぞ 鰻とり食せ

(十六—三八五三)

『万葉集』には、実に多くの四季が詠まれています。それらは特別に珍しい古代だけのものではなく、現代のわたしたちが目にし耳にするお馴染みのものばかりです。本書は、万葉を歳時記的に分けて、より親しみやすく編集しました。

ふと口ずさむ万葉に感動し、嬉しさに心なごみ、生きている喜びを実感する、そんな日があなたに訪れるのを期待して……。

吉野正美



もくじ

春の章

8

あしび(馬酔木)

10

うぐいす(鶯)

12

うめ(梅)

14

かすみ(霞)

16

かたくり(堅香子)

18

かっこう(呼子鳥)

20

からたち(枳)

22

きじ(雉)

24

さくら(山桜)

26

しじみ(蜆)

28

すみれ(堇)

30

すもも(李)

32

せり(芹)

34

つつじ(躑躅)

36

つばき(椿)

38

つばめ(燕)

40

ねこやなぎ(河楊)

42

野焼き

44

ひばり(雲雀)

46

ふじ(藤)

48

まゆ(繭)

50

もも(桃)

52

やまぶき(山吹)

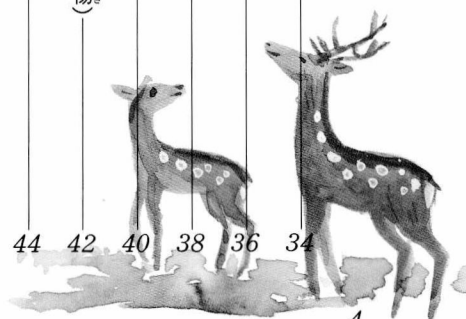
54

よめな(菟芽子)

56

わらび(蕨)

58



夏の章

あじさい(紫陽花)

あゆ(鮎)

あり(蟻)

あわび(鰙)

う(鵜)

うなぎ(鰻)

うのはな(卵の花)

うり(瓜)

か(蚊)

かきつばた(杜若)

くも(蜘蛛)

小鹿の角

衣更え

しょうぶ(菖蒲草)

すだれ(簾)

せみ(蟬)

つゆくさ(鴨頭草)

ねむ(合飲木)

はす(蓮)

はまゆう(浜木綿)

ひおうぎ(黒玉)

ひぐらし(蜩)

ひめゆり(姫百合)

ひるがお(容花)

べにばな(紅)

ほたる(蛍)

ほととぎす(時鳥)

60

62

64

66

68

70

72

74

76

78

80

82

84

86

88

90

92

94

96

98

100

102

104

106

108

110

112

114



まぐろ(鮪)

116

みかん(橘)

118

みなづき(六月)

120

むぎ(麦)

122

むらさき(紫草)

124

やぶかんぞう(萱草)

126

ゆうだち(夕立)

128

ゆり(百合)

130

秋の章

132

あかね(茜)

134

あわ(粟)

136

いね(稲)

138

いも(芋)

140

うずら(鶉)

142

おみなえし(女郎花)

144

かり(雁)

146

ききょう(朝顔)

148

くず(葛)

150

くり(栗)

152

けいとう(韓藍)

154

こおろぎ(蟋蟀)

156

すすき(尾花)

158

すすき(鱸)

160

たで(蓼)

162

たなばた(織女)

164

つき(月)

166

とんぼ(蜻蛉)

168

なし(梨)

170

なでしこ(撫子)

172

はぎ(萩)

174

ひがなばな(耆師)

176

まつたけ(秋の香)

178

もず(百舌鳥)

180

もみじ(黄葉)

182

冬の章

184

あられ(霰)

186

かぶら(蔓菁)

188

かも(鴨)

190

かもめ(鷗)

192

くま(熊)

194

こおり(氷)

196

しわす(十二月)

198

新年

200

すごろく(雙六)

202

たか(鷹)

204

ちどり(千鳥)

206

つる(鶴)

208

ふな(鮒)

210

ゆき(雪)

212

わし(鷲)

214



春の章

氷室神社(奈良市)のしだれ桜。



あしび（馬酔木）

磯の上に

生ふる馬酔木を

手折らめど

見すべき君が

ありと言はなくに

大伯皇女

（二一—一六六）

▲アシビの花（春日大社）。

大伯皇女（父天武天皇・母大田皇女）は、大津皇子の姉である。母と早く死別した二人は仲がよく、大津にとつて皇女は母代わりでもあった。姉弟に不幸が訪れたのは朱鳥元（六八六）年十月である。

持統皇后は、天武天皇の後継者は一人息子の草壁皇子と決めていた。ところが、人心は甥の大津へと傾いてきた。そこで持統は僧行心に命じて罾をかけ、謀反の罪で十月二日に大津を逮捕、翌三日に処刑してしまう。この時、大伯皇女は齋宮として伊勢神宮にいた。

「岩のほとりのアシビを手折って大津に見せてあげたいのに、弟はもういないんです。せめて誰かひと声かけてくれないかしら……、弟は生きていますよ、と」

縁者を慰めるために「亡くなった人に会いましたよ」と声をかける習慣があつたといわれるが、罪人は別で、誰も言葉はかけてくれない。それが皇女を一層悲しませていたのである。

春になると、奈良公園にはスズランのようなアシビの白い花が鈴なりに咲くが、シカたちは見向きもしない。馬酔木と書き、あしがしびれることを知っているからである。



うぐいす (鶯)

梅の花

咲ける岡辺に

家居れば

羨しくもあらず

鶯の声

作者不詳

(十一—八二〇)

▲ウグイス。(撮影・井田俊明)

梅に鶯といわれる。ウメの花がほころびはじめると、ウグイスの姿より先に「ホーホケキョ」が聞こえてくる。文字通りの鶯色で、黄色でもなく緑色でもない。スズメより大きいとはいえ、あの小さな体から、えもいわれぬ春の音色を聞かせてくれる。

「梅の花が咲く岡辺に家があるので、ウグイスの声がホントによく聞こえること。格別に珍しいことでもないけれど、ウグイスの鳴き声は閑かで、いいねえ」

ウメの花の甘い薫りが春風にのって屋敷の中に流れてくる。春告鳥のウグイスもやってきて、まさに春爛漫である。

季節によって住み場所を変えるウグイスは、夏は山に住んでいるが、秋から冬にかけては人里に近い平地で、「チャッチャツ」と、いわゆる笛鳴きをする。そして、春本番を前に「ホーホケキョ」の名調子で春のテーマ音楽を奏でてくれる。

ウグイスのウは生えるという意味で、草木が茂っているところ、グイは食うという意味、スは巢のことで、「草叢などに巢食う鳥」という意味から名付けられたともいわれる。



うめ（梅）

酒杯（さかづき）に

梅（うめ）の花浮かべ

思（おも）ふどち

飲（の）みての後（のち）は

散（ち）りぬともよし

お伴（おはん）坂上（さかうえ）郎女（いらつめ）

（八一—一六五六）

しだれ梅（うめ）（若草（わかくさ）山（やま）簾（さん））。

ウメが中国から渡来したのは奈良時代である。舶来の清楚な白い花は、万葉びとの人気の的であった。花といえばウメで、サクラではなかった。『万葉集』の百二十九首がウメの花であるのに、サクラは四十二首、いかにウメの花が新鮮であったかが理解できる。

ウメが古代の人々の花見の対象であったことを、坂上郎女が教えてくれる。梅花の宴席が賑わっている。思い思いに酒を酌みかわす客人たち……。そんな席でのご挨拶の歌であろうか。

「いい気分なこと。お酒は親しい方たちと飲むのが、一番ですねえ。ごらんのように梅の花が満開です。これだけ飲んで、お花見もしたことですから、もう梅の花が散ったって構いませんよ」

今もウメの花見はあるが、サクラの花にはかなわない。しかし、凜とした空気の中に咲く白い一重のウメの花は、やはり日本人好みで、清楚な薫りが一層わたしたちを魅きつける。それは、サクラの華やかさとは違った、ウメならではの肅とした美しさなのである。

白梅に紅梅、八重に一重など、数百種にも及ぶウメは、五月雨のころに熟むところから、ウムが転訛してウメになったといわれる。

